

41854

教科書文庫

4
815
41-1937
20060 68971

1936

Kodak Gray Scale



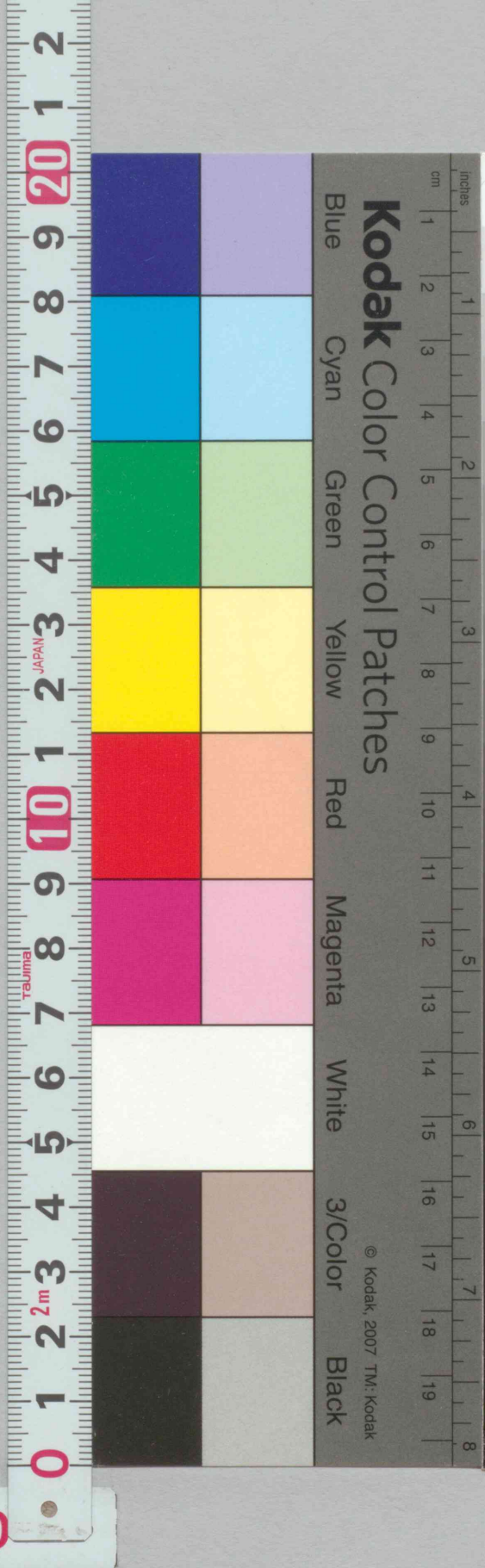
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
815
0211

訂三 中學國文典

初年級用



資料室

濟定檢省部文
科文漢語國校學中 日五十月一年二十和昭

教科書文庫
4
815
41-1937
2000068971

4a
815
OB 11

訂三
中學國文典

初年級用

附廣島高等師範學校
國語漢文研究會著

京極書店發行



広島大学図書
2000068971

例言

- 一 本書は前に編纂した改訂中學國文典初年級用を更に改訂したものである。
- 一 理論よりも實際を重んずるが故に、例文によつて歸納的に了解し得るやうにつとめ、煩雜な説明は之を避けた。
- 一 練習題は、特に平易を旨とする爲、大部分尋常小學國語讀本中から之を採り、その上大部分單語に分けておいた。なほ自修題を添へ、餘裕有る者の練習に便した。
- 一 取扱上の便利の爲、動詞・形容詞・助動詞・助詞の如き、先づ文語文法を説き、口語文法を之に併せ説くことにした。
- 一 品詞の概念を與へた後、主要な品詞の詳説に及ぶのが自然であると思ふが故に、今はそれによつた。

- 一 動詞は六つの活用形を知つた後、其の活用の種類を説くのが便宜であるから、それに従つた。
- 一 古文にのみ用ひて現代文に用ひない語法は成るべく避けることにし、記憶の便宜上特に出したものは、現代文には用ひないことを明らかにした。
- 一 助動詞の接續は、要目には第一學年の項にも第四學年の項にも明記してないが、本書は之を略して上級用に説くこととした。
- 一 助詞は用例を主とし、係結の法則にだけ説明を加へ、其の他は上級用に譲ることとした。

昭和十一年八月

著者識

訂三 中學國文典 初年級用

目次

總説……………一

前篇

第一章	名詞	……………	二
第二章	代名詞	……………	五
第三章	動詞	……………	八
第四章	形容詞	……………	一〇
第五章	助動詞	……………	一三
第六章	助詞	……………	一七
第七章	副詞	……………	一九

第八章 接續詞……………三
 第九章 感動詞……………四

後 篇

第一章 文語動詞の活用形……………六
 第二章 文語動詞の活用の種類……………三
 一 四段活用……………三
 二 上二段活用……………三
 三 上一段活用……………三
 四 下二段活用……………四
 五 下一段活用……………四
 六 カ行變格活用……………五
 七 サ行變格活用……………五
 八 ナ行變格活用……………六

第三章

文語動詞の識別法

……………三九

一 活用の種類を識別する法……………三九
 二 活用の假名遣を識別する法……………四〇

第四章

口語動詞の活用

……………四四

一 四段活用……………四四
 二 上一段活用……………四五
 三 下一段活用……………四六
 四 カ行變格活用……………四七
 五 サ行變格活用……………四八
 六 形容動詞……………五〇

第五章

形容詞の活用

……………五三

文語形容詞……………五三

○ 口語形容詞 四
 ○ 第六章 用言の音便 五
 動詞の音便 五
 形容詞の音便 六

○ 第七章 文語助動詞の種類及び活用 七

一 一時の助動詞 七
 二 受身の助動詞 七
 三 可能の助動詞 七
 四 使役の助動詞 七
 五 崇敬の助動詞 七
 六 推量の助動詞 七
 七 打消の助動詞 七
 八 指定の助動詞 七
 九 咏嘆の助動詞 七

○ 第八章 口語助動詞の種類及び活用 七

一〇 願望の助動詞 七
 一一 比況の助動詞 七
 一 一時の助動詞 七
 二 受身の助動詞 七
 三 可能の助動詞 七
 四 使役の助動詞 七
 五 崇敬の助動詞 七
 六 推量の助動詞 七
 七 打消の助動詞 七
 八 指定の助動詞 七
 九 願望の助動詞 七
 一〇 比況の助動詞 七
 第九章 助詞の用法 附係結の法則 七
 はがの 七

を・に・へ・と	六
も・より・まで・にて・ば・とも	七
ど・ども・つゝ・て・だに・すら	八
さへ・のみ・ばかり・かな・がな・ばや・な・よ・かし	九
ぞ・なむ・や・か	十
こそ	十一
係結の法則	十二
第一〇章 接頭語・接尾語	十四

附録 文法上許容ニ關スル事項

表

- 一 動詞活用表
- 二 形容動詞活用表・形容詞活用表
- 三 文語動詞活用識別表・動詞假名遣識別表・用言音便表
- 四 助動詞活用表

訂三 中學國文典 初年級用

總說

庭の櫻がきれいに咲きました。

右の例のやうに、一つのまとまつた思想をあらはしたものを文といふ。

文は、これを分解する時は、右の傍線を施した部分のやうに、それぞれ一つの意味又は働をもつた單位に分れる。かやうな言語の一單位を單語又は語といふ。
庭の櫻咲きましたのやうに、いくつかの單語が集つて一つの意

單語
文

總

說

品 句

詞

味をなすものを句といふ。
單語をその意味・働・形等の上から左の九種に分ち、その各を品詞といふ。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞 助詞 副詞
接續詞 感動詞

前 篇

第一章 名詞

- 一 楠木正成は南朝の忠臣である。
- 二 富士は水彩もて畫がける繪の如く、窓の右に立ちまた左にあらはる。

名

詞

數

詞

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名稱をいふ語を名詞といふ。

名詞中、左の例のやうに、事物の數量又は順序をあらはす語は、特に數詞と呼ぶことがある。

- 一 四と五との和は九である。
- 二 鉛筆一ダースの價が三十錢だ。
- 三 前列右より第二番目なるは我が机なり。

練習題

次の文中から名詞を選び出し、數詞は特に指摘せよ。

- (1) 麓の川を白帆が三つ四つ通つてゆく。
- (2) 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた。

- (3) 日本では明治の初め頃まで太陰曆を用ひてゐた。
- (4) 光の色が太陽に似て、しかも熱の少い電燈を發明した。
- (5) 父はダーウインを醫者にしようと思つた。
- (6) ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫彫刻の多いのは、恐らく世界第一であらうと思ひました。又エツフェル塔にも登つて見ました。塔の高さは三百メートルもある。
- (7) 藍白赤の三色を以て染分けられたるはフランスの國旗なり。
- (8) 五丈三尺の大佛千二百年の面影を残せり。

第二章 代名詞

代名詞
 人代名詞
 指示代名詞

一 これは誰の書物だらう。
 ニ それをあちらの机の上に置いて下さい。
 三 汝は彼と親友なりや。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名目の代りに使つてこれを指示する語を代名詞といふ。

代名詞中、人の名の代りに使はれるものを人代名詞といひ、事物場所方向を示すものを指示代名詞といふ。

人代名詞の例

わ われ 私 僕 小生
 汝 あなた お前 君
 かれ あれ あの方 この人

指示代名詞の例

誰	どなた	どの方			
こ	これ	そ	それ	あれ	どれ
こゝ	そこ	あそこ	いづこ	どこ	
こなた	こちら	そなた	そちら		
あなた	あちら	いづかた	どちら		

この・その・かの・あの・どの等は、本来代名詞こ・そ・か・あ・どに助詞のが添うたものであるが、便宜上一代名詞として取扱つてよい。

名詞代名詞を體言といふ。

體言

練習題

一、次の文中から代名詞を選び出し、其の種類をいへ。

- (1) あなたもずるぶん大きくなりましたね。
- (2) どれを見ても枝といふ枝にはもう黄金色の實がなつてゐる。
- (3) どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木だ。
- (4) あちらでもこちらでも、さえた缺の音がちよきんくと聞える。
- (5) あゝ、あれは僕の作つた曲だ。君、聴き給へ。
- (6) こはたゞ事ならず。
- (7) 彼處にゆきてかの畫師のするさまを見給へ。
- (8) そはいと名残惜しきことなり。

二、右のほか、人代名詞を知つてゐるだけ挙げよ。

第三章 動詞

一 宣長は眞淵の志をつぎ、努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。

二 孔子は、少時より學問に勵み、長じて後、魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、遂に魯を去りぬ。

動詞

右の例、傍線を施した語のやうに、事物の動作をあらはす語を動詞といふ。

- 一 棚の上に箱があり、その箱の中に手紙がある。
- 二 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり。

右のある(あり)は事物の存在をあらはす語であるが、これも動詞である。

練習題

次の文中から動詞を選び出せ。

- (1) 宣長は常に文通して眞淵の教を受けた。
- (2) 風が吹く、蝶々のやうに花が舞ふ。
- (3) 刈る、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働く。
- (4) 山を越え河を下り、湖を渡りて一村に出づ。
- (5) たま〜大阪に出水あり。家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。

第四章 形容詞

一 鶯は形はみにくい、聲は美しい。

二 山高く、水深し。

三 煙たなびくとまよこそ、我がなつかしき住家なれ。

右の例の傍線を施した語は、事物の性質又は状態をあらはしてゐる。事物の性質又は状態をあらはす語は他にもあるが、其中で左の例のやうに、いひ切る場合に、口語ならば「い又はしい、文語ならばし」となるものを形容詞といふ。

口語

長い
短い

文語

長し
短し

形容詞

用言

悲しい
楽しい

悲し
樂し

動詞・形容詞を用言といふ。

練習題

次の文中から形容詞を選び出せ。

- (1) 悔しいのか、嬉しいのか、悲しいのか、恥づかしいのか。
- (2) 赤い花が一面に咲いて、誠に美しい。
- (3) 寒い冬が過ぎて、暖い春が来た。
- (4) 近き船は行けども、遠き帆影は動かんともせず。
- (5) 今日の文明の利器は、直接間接彼の天才によらざるもの殆どなし。

第五章 助動詞

- 一 改めようと思へば改められる。
- 二 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は遂に一錢も残らずなりぬ。

助動詞

右の例の傍線を施した語のやうに、動詞に添うて其の意義を助け、色々な意味をあらはす語を助動詞といふ。助動詞は主として動詞に添うて其の意義を助けるものであるが、次の場合のやうに他の品詞に添ふこともある。

名詞に添ふ場合

- 一 それが男子としての本分だ。
- 二 楠木正成は忠臣なり。

代名詞に添ふ場合

- 一 それを棄てたのは私です。
- 二 古今第一の忠臣は彼なり。

形容詞に添ふ場合

- 一 私が悪いのだ。
- 二 あの山は随分高いのです。

他の助動詞に添ふ場合

- 一 多分明日は発表せられよう。
- 二 實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

かやうに助動詞は、動詞・名詞・代名詞・形容詞又は他の助動詞に添うて、その意義を助けるものである。

- 一 落花雪の如し。(雪のやうだ)

二 其の速きことは汽車の走るが如し。
右の例のやうに、如しやうだといふ助動詞は、の又はがを挟んで上に續くのが普通である。

練習題

一、次の文中傍線のある語はみな文語の助動詞である。その意味を口語でいへ。

- (1) 明日は雨降らん。
- (2) 彼は單身樺太におもむけり。
- (3) 夜もいとふけ、月も既に入りぬ。
- (4) 唯をりく、興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

- (5) おのれは主人を迎へにとて出で行きけり。
- (6) 命も危かるべし。
- (7) 患者に薬を飲ます。
- (8) 頼朝義経に義仲を攻めさす。
- (9) 旭日昇天の勢あるを思はしむ。
- (10) 海まきあぐるたつまきも、起らば起れ驚かじ。
- (11) もはや泣くまじ。
- (12) 母は音楽を好まる。
- (13) 天顔殊にうるはしく笑ませ給ふ。
- (14) 神前にさげたしと願ひ出でたる者數多しといふことなりき。

二次の文中から助動詞を選び出せ。

- (1) 下駄の音が聞える、弟が歸つたらしい。
- (2) 日本人ほど淡白な色や味はひを好むものはあるまい。
- (3) 雨は降るだらう。しかし風は吹くまい。
- (4) 小僧一人だけにいろくらの用を足させた。
- (5) 主人にほめられた。
- (6) 是非學校に入れてもらひたいと願った。
- (7) 暗い箱の中から、小さなねちが急に明るい處へ出された。

助詞

第六章 助詞

- 一 期限までに|出せばよいが、萬一後れると|無効になる。
 - 二 雨が激しいのに、|風さへ|加つた。
 - 三 東國へ|行き給ふと|聞きしに|今又此處に|來られしは|何故ぞ。
- 右の例の傍線を施した語のやうに、種々の語に添うて他の語との關係をあらはす語を助詞といふ。

練習題

次の文中から助詞を選び出せ。

- (1) 嬉しい|につけ|悲しい|につけて|思ひ出すのは|親の|

- ことだ。
- (2) ふと目を覺すと、遠くでかすかに犬の鳴く聲がする。
- (3) 汽車は密林の間を通り抜けて、やがてトンネルにはいる。
- (4) 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、その有様は何事だ。
- (5) 君が代は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて昔のむすまで。
- (6) 停車場の外に出づれば、秋晴の空すみて暖さ春の如し。

第七章 副詞

- 一 島がかすかに見える。
- 二 道は非常に険しい。
- 三 極めて美しい森林の中を、大なる河ゆるやかに流る。
- 右の例のかすかにゆるやかに見える流るといふ動詞の意味を修飾し、非常に極めては、険しい、美しいといふ形容詞の意味を修飾してゐる。かやうな語を副詞といふ。
- 一 彼はやゝ暫く考へてゐた。
- 二 この犬はいと速に走る。

右の例のやうに、副詞は又他の副詞の意味を修飾することもある。

る。

一 かすかに鳥が見える。

二月が明るくて、まるで晝のやうだ。

右の例のやうに、副詞は其の下句全體を修飾することもある。かやうに副詞は、動詞形容詞他の副詞又は句等の意味を修飾するものである。

練習題

一次の文中から副詞を選び出し、その修飾してゐる語句を示せ。

- (1) 夜はほの／＼と明けそめた。
- (2) 雨戸をがらりと繰ると、夜風がさつと吹込んで、燈火がちら／＼となびく。

- (3) 町はづれの川で水浴をした。水は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。
- (4) 汽車はいと靜かに動き始めぬ。
- (5) 文天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。
- (6) 立木極めて少かりしかば、新に植込みたる木の數實に十數萬本に及べり。

二次の副詞を使つて短文を作れ。

- | | | |
|-----|------|------|
| 必ず | せつせと | ちやうど |
| やがて | めつたに | あたかも |
| | | よもや |

第八章 接續詞

- 一 石炭・石油及び瓦斯は、現代の主なる燃料である。
- 二 友人達は昨日登山した。然し私は行かれなかつた。
- 三 書を読み、且、字を習ふ。

接續詞

右の例の傍線を施した語のやうに、その前後の語句又は文を接續する語を接續詞といふ。

練習題

一、次の文中から接續詞を選び出せ。

- (1) 氣候もよい。それに交通も便利だ。
- (2) 彼は昨日出發した。だらうか、それとも延期した

だらうか。

- (3) 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。そこで先づ順序として、萬葉集の研究を始めました。

- (4) 吉野に遊び、ついで高野山にのぼれり。

- (5) 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや。

- (6) 孔子は廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりき。

二、次の接續詞を使つて短文を作れ。

- 故に もしくは しかしながら ところが
- すると もつとも そこで 又

第九章 感動詞

- 一 おやく、これは驚いた。
- 二 はい、承知いたしました。
- 三 嗚呼、悲しいかな。
- 四 あはれ、友は此の世を去りぬ。

右の例の傍線を施した語のやうに、感動した場合に覺えず發する語や、呼びかけ、應答の語を**感動詞**といふ。

注意 「あ、困つたね」「あな面白の樂の音や」のあ、あなたは感動詞であるが、やね等は感動の意をあらはす助詞である。即ち感動詞は、獨立した發聲の語だけをいふのである。

感動詞

練習題

次の文中から感動詞を選び出せ。

- (1) 　こら、どうした。命が惜しくなつたか。
- (2) 　あ、あなたはベートーベン先生ですか。
- (3) 　まあ何といふよい曲でせう。
- (4) 　「やあすつかり變つた。」と聲をあげると、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といった。
- (5) 　「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」
- (6) 　すは勝つたるぞ。
- (7) 　いで大船を乗出して、我は拾はん海の富。

後篇

第一章 文語動詞の活用形

書		起	
か………ず	む	き………ず	む
たり	ば	たり	ば
き………て	始む	き………て	始む
く………こと	人	く………こと	人
け………ども	ど	くれ………ども	ど
け	ば	きよ	ば

(蹴)		(射)		(來)		棄	
け………ず	む	い………ず	む	こ………ず	む	て………ず	む
たり	ば	たり	ば	たり	ば	たり	ば
け………て	始む	い………て	切る	き………て	始む	て………て	やすし
ける………こと	人	いる………こと	人	くる………こと	人	つる………こと	人
けれ………ども	ど	いれ………ども	ど	くれ………ども	ど	つれ………ども	ど
けよ	ば	いよ	ば	こよ	ば	てよ	ば

有		(爲)		死	
れ	れ……どもど	せよ	すれ……どもど	ね	ぬれ……どもど
る……こと	り	する……こと	す	ぬる……こと	ぬ
人	り………たり	人	し………たり	に………たり	に………たり
	たり	終る	たり	絶ゆ	たり
	がたし	は	終る	は	は
	は	は	は	は	は
	は	は	は	は	は

右の例のやうにして、すべての動詞をしらべると、

一 大部分の動詞には、變化する部分と變化せぬ部分がある。

二 動詞の變化は五十音圖の同行の間に起る。

三 動詞は使ひ方によつて六つの形に變化する。

といふことがわかる。

かやうに動詞の形の變化することを活用といひ、變化せぬ部分を語幹、變化する部分を語尾といひ、又動詞の活用の六つの形を活用形といふ。

第一形 主として助動詞ずむ、助詞ば等に續けて動作が未だ成立つてゐない意をあらはす形であるから未然形といふ。

第二形 主として用言に連なる形であるから連用形といふ。
一 書を讀み、字を習ふ。

活	語	語	活
用			用
形	尾	幹	用

ニ父は畠に出で、子は山に行く。
右の例のやうに、連用形は、又文意を中止して下に續ける爲に
使はれる形である。

遊ユび 讀ヨみ書キき 山ヤマ登ノり

連用形は又右の例のやうに、轉じて名詞となる形である。

第三形 主として文意を終止する爲に使はれる形であるから

終止形といふ。

第四形 主として體言に連なる形であるから連體形といふ。

第五形 主として助詞どもどば等に續けて、動作が已に成立つ

てゐる意をあらはす形であるから已然形といふ。

第六形 専ら命令の意をあらはす爲に使はれる形であるから

命令形といふ。

終止形 連體形 已然形 命令形

練習題

一、次の文中から動詞を選び出し、それを活用させよ。

- (1) 猿も木より落つることあり。
- (2) 夏は來ぬ。木々の緑、色鮮に目も覺むる心地す。

二、次の語を活用させよ。

叫コぶ 閉ツづ 釣ツる 得ツ 着ツる 恥ツづ 流ナる 煮ナる 有アり 來キる
 來キ 爲ス 積ツむ 死シぬ 報ウゆ 用ユふ 居スる 蹴キる 告ツぐ

自修題

次の文中から動詞を選び出し、それを活用させよ。

- (1) 都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。
- (2) 旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そゞろに別れ難き思あり。

第二章 文語動詞の活用の種類

四段活用

一 四段活用

語	語幹	語尾
降る	ふ	ら
書く	か	り
		る
		る
		れ
		れ

右の例のやうに、五十音圖のアイウエの四段に活用するものを四段活用といふ。

四段活用の動詞は五十音圖のカ(ガ)サ(タ)ハ(バ)マ(ラ)の各行にある。

上二段活用

二 上二段活用

語	語幹	語尾
悔ゆ	く	い
起る	お	い
		ゆ
		ゆる
		ゆれ
		いよ

右の例のやうに、五十音圖のイウの二段に活用し、連體形に、已然形に、命令形によが添ふものを上二段活用といふ。

上二段活用の動詞は五十音圖のカ(ガ)タ(ダ)ハ(バ)マ(ラ)の各行にある。

上一段活用

三 上一段活用

語	語幹	語尾
射る	(い)	い
見る	(み)	い
		いる
		いる
		いれ
		いよ

右の例のやうに、五十音圖のイの段にだけ活用し、終止形と連體

下二段活用

形に^レ已然形に^レ命令形によ^レが添ふものを上一段活用といふ。
上一段活用の動詞は五十音圖の^カナ^ハマ^ヤウの各行にある。

四 下二段活用

語	得	棄
語幹/語尾	(う)	す
未然	え	て
連用	え	て
終止	う	つ
連體	うる	つる
已然	うれ	つれ
命令	えよ	てよ

右の例のやうに、五十音圖の^ウエの二段に活用し、連體形に^レ已然形に^レ命令形によ^レが添ふものを下二段活用といふ。

下二段活用の動詞は五十音圖の各行及び^ガサ^ダバの各行にある。

下一段活用

五 下一段活用

語	蹴
語幹/語尾	(け)
未然	け
連用	け
終止	ける
連體	ける
已然	けれ
命令	けよ

蹴るといふ動詞は右のやうに活用する。この活用を下一段活用といふ。

下一段活用の動詞は蹴るといふ一語だけであるが、此の語は今は四段活用に使はれることもある。

以上五種の活用を正格活用といふ。

正格活用

カ行變格活用

六 カ行變格活用

語	來
語幹/語尾	(く)
未然	こ
連用	き
終止	く
連體	くる
已然	くれ
命令	こよ

來といふ動詞は右のやうに活用する。この活用をカ行變格活用略してカ變といふ。

カ變の動詞は來といふ一語だけである。

七 サ行變格活用

サ行變格活用

爲といふ動詞は右のやうに活用する。この活用をサ行變格活用略してサ變といふ。

サ變の動詞は元來すといふ一語だけであるが、他の語にすが添うて、多くのサ變の動詞が出来る。例へば

勉強す 報ず 論ず 旅す 全うす 重んず

八 ナ行變格活用

語	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ

死ぬといふ動詞は右のやうに活用する。この活用をナ行變格活用略してナ變といふ。

ナ變の動詞は、死ぬの外往ぬといふ語があるが、今は方言の外は使はれない。

九 ラ行變格活用

語	語幹 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
有り	あ	ら	り	り	る	れ	れ

有りといふ動詞は右のやうに活用する。この活用をラ行變格活用略してラ變といふ。

形容動詞

ラ變の動詞は、有りの外居り侍りといふ二語があるが、今は居りが四段に使はれる外、あまり使はれない。

- 一 烈しかり…烈しくありのつゝまつたもの。
- 二 静かなり…静かにありのつゝまつたもの。
- 三 堂々たり…堂々とありのつゝまつたもの。

形容動詞

右の例のやうに、形容詞又は副詞に動詞ありが添うて、その形をつまつたものがある。意味は形容詞と同じく性質又は状態をあらはしてゐるが、形はラ變の動詞と同じであるから、これを形容動詞といふ。

文語の形容動詞はラ變の動詞と見なす。

種類	語	語幹/語尾		未然	連用	終止	連體	已然	命令
		語幹	語尾						
第一	(烈しかり)	烈しか	ら	ら	り		る		れ
第二	靜かなり	靜かな	ら	ら	り		る		れ
第三	堂々たり	堂々た	ら	ら	り		る		れ

變格活用

以上四種の活用を變格活用といふ。文語動詞の活用には以上の九種がある。

第三章 文語動詞の識別法

一 活用の種類を識別する法

語数が少くて、暗記するとよいもの。

上一段 著る 似る 煮る 干る 見る (願みる 惟みる)
 鑑みる 試みる 射る 鑄る 居る 率ゐる

下一段 蹴る
 カ變 く(來)
 サ變 す(爲) 他語に(す)の添うたもの。
 ナ變 死ぬ(往ぬ)
 ラ變 有り(居り) (侍り)

右の外は

四 段 打消の^レずがアの段の音に添ふ。 讀ま…ず。
 上二段 打消の^レずがイの段の音に添ふ。 落ち…ず。
 下二段 打消の^レずがエの段の音に添ふ。 消え…ず。

二 活用の假名遣を識別する法

(イ) ア行ハ行ヤ行ウ行の識別法

ア行 得…下二段

ウ行 植^ル 飢^ル 据^ル…下二段

居^ル 率^ル…上一段

ヤ行 終止形がゆとなるもの。

右の外はすべてハ行活用である。

(ロ) ザ行ダ行の識別法

ザ行 1 混^ズ…下二段

2 サ變動詞中の講^ズ・應^ズ・論^ズ・變^ズ・重^ズ・ん^ズ等のやうに語尾の濁るもの。

右の外はすべてダ行活用である。

練習題

一次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

- (1) 内海の沿岸及び島々には名勝の地^二少から^一ず。
- (2) 船の周圍に^ハ彈丸^ヲ落下して、水煙を^テ立て、時に^ニ全く船影を^シ蔽ふことあり。
- (3) 朝^ニ疾く^テ起きて^テ稻田のあたりを^ニさまよふ。
- (4) 畫師は夜もすがら^ニ寝ねずして、明日は^ニかく^テ畫がかんなど^ヲ獨言して^テゐたり。

(5) 海ノの静レかなる四 ことは鏡ノの如ク、朝日夕夕日をを負ヒひ下て上島ガがくレれゆく四 白帆ノの影モのどカかなり四。

二次の語を活用の種類に分類して活用表をつくれ。

報ヲの 押ス 鑄ル 受ク 死ム 去ル 蹴ル 來ル 歴ス 旅行ス
 率ル 顧ミ 願フ

自修題

一、次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

- (1) 愛スすベく美シき山野ハ、更ニ太古以來ノ歴史ト結ビ、文學ト結ビて、
 感イよク、深キを覺ユ。
- (2) 富貴ハ人ノのねガふ所ナり。然レども正シき道ニよリに非ザれば
 我ニに居ラず。

(3) エヂソンは例の如く實驗室にこもりて研究に餘念なかりしが、ふ
 と見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。何心なく手に取りて
 眺めたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

二次の文中の假名遣の誤を正せ。

- (1) 我が望は遂に絶へたり。
- (2) 飢ゆとも食を乞わず。
- (3) 人を教ゆるはむつかしきことなり。
- (4) 覺へず落涙せり。
- (5) 榮ふる御代にあえる我等は幸福なり。
- (6) 田を植ふる乙女の歌遙に聞ゆ。
- (7) 汝我が言を用いざれば、老ひて後に悔ゆることあらん。

第四章 口語動詞の活用

四段活用

一 四段活用

有					書					死							
れ	れ	る	る	り	ら	け	け	く	く	き	か	ね	ね	ぬ	ぬ	に	な
.....
ば		こと	人	がたい	う	ば	こと	人	始める	ない	う	ば	こと	人	絶える	ない	う

上一段活用

二 上一段活用

右の例のやうに、文語の四段は口語でも同じであるが、文語のナ
變・ラ變は、口語では四段となる。

有	死	書	語
ぬ	ぬ	く	語幹
あ	し	か	語尾
ら	な	か	未然
り	に	き	連用
る	ぬ	く	終止
る	ぬ	く	連體
れ	ね	け	假定
れ	ね	け	命令

(射)					起				
い	い	い	い	い	き	き	き	き	き
.....
ない	よう	切る	こと	人	ない	よう	出る	こと	人
(いよ)					(きよ)				
い	い	い	い	い	き	き	き	き	き
.....
ば	こと	人			ば	こと	人		

起きる	射る	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
お	(い)		き	い	いる	きる	きれ	きよ

右の例のやうに、文語の上一段は口語でも同じであるが、文語の上二段は口語では上一段となる。但し命令形は二様になる。

下一段活用

三 下一段活用

(蹴)

け	け	け	け	け	け	け	け	け
……ない	……ます	……こと	……ば	……ない	……ます	……こと	……ば	……ない
よう	始める	人		よう	やすい	人		よう

(棄)

て	て	て	て	て	て	て	て	て
……ない	……ます	……こと	……ば	……ない	……ます	……こと	……ば	……ない
よう				よう				よう

カ行變格活用

四 カ行變格活用

右の例のやうに、文語の下一段は口語でも同じであるが、文語の下二段は口語では下一段となる。但し命令形は二様になる。
蹴るは、口語では文語よりも更に四段活用に使はれることが多い。

語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
蹴る	(け)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
棄てる	す	て	て	てる	てる	てれ	てよ

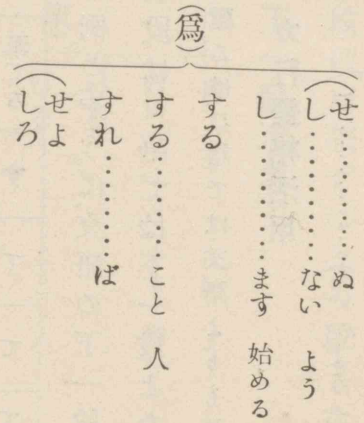
(來)

こ	き	くる	くれ	こい
……ない	……ます	……こと	……ば	
よう	始める	人		

來る	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
(く)			こ	き	くる	くる	くれ	こい

サ行變格活用

右のやうに、口語のサ變は、文語とは終止形・命令形が違ふ。
五 サ行變格活用



爲る	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
(す)			しせ	し	する	する	すれ	しせよ しろよ

假定形

右のやうに、口語のサ變は、文語とは未然形・終止形・命令形が違ふ。なほ文語の活用形は口語でも同じであるが、唯文語の已然形は口語では假定形となる。これは形容詞・助動詞でも同じである。即ち口語動詞の活用は左の五種となる。

四段 活用……文語の四段・ナ變・ラ變

上一段 活用……文語の上二段・上一段 命令形に二様の使ひ方がある。

下一段 活用……文語の下二段・下一段 使ひ方がある。

カ行變格活用……終止形・命令形が文語と違ふ。

サ行變格活用……終止形が文語と違ふ外、未然形・命令形に二様の使ひ方がある。

六 形容動詞

種類	語		未然	連用	終止	連體	假定	命令
	語幹	語尾						
第一 (烈しい)	烈し	から		かつ				
第二 静かだ	静か	だら		だつ	だ	な	なら	

右の例のやうに、口語の形容動詞は文語と餘程違つてゐる。

第二種を丁寧にいふ場合は、でせ(う)でし(た)ですのやうに活用する。

練習題

一次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

- (1) 父が木を伐れば、自分は雑草を刈る、父が鳥を打てば、自分は種をまく。
- (2) 裁判の目的は決して人を争はせ又は人を罰する

ことではない。

- (3) 火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない。
- (4) 波が静かなら船を出してもよからう。

二次の文中○のところに適當な假名を入れよ。

- (1) 急に天が曇つて来て、星影一つさへ見○ない。
- (2) 大砲を鑄て砲臺に据○る。
- (3) 問ふことを恥○るものは、立派な人にはなれない。
- (4) 老○ては子に従へ。
- (5) 庭園に花を植○て楽しむ。
- (6) 彼の率○る一隊は敵の右側に出た。
- (7) 木枯の吼○る夜は、何ともい○ぬ物凄さを感じ○る。

自修題

一次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

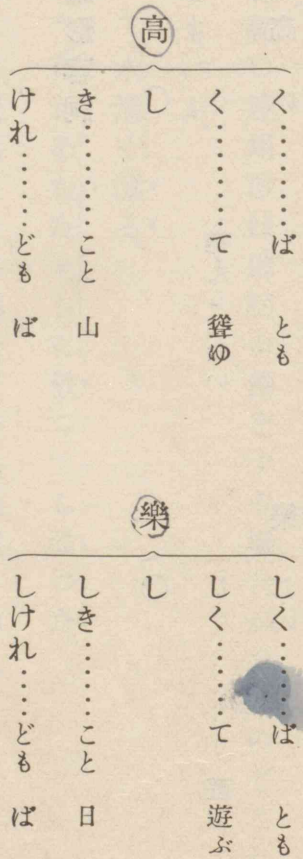
- (1) 鶏が麥のこぼれたのを食ひに来ては、追はれて逃げて行く。
- (2) ひぐらし蟬の聲が聞え始めると、暑さがどんなにはげしくても、妙に秋らしい氣がする。
- (3) 昔の武士はたとひ飢ゑて死ぬことがあらうと、二君に仕へることを恥ぢた。
- (4) 王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。
- (5) それは弓が惜しかつたのではない。この弱い弓を取られては源氏の名折れになるからだ。

二、文語口語動詞の活用の比較表を作れ。

⑥ 三行の教科書

第五章 形容詞の活用

文語形容詞



右の例でわかるやうに、形容詞は

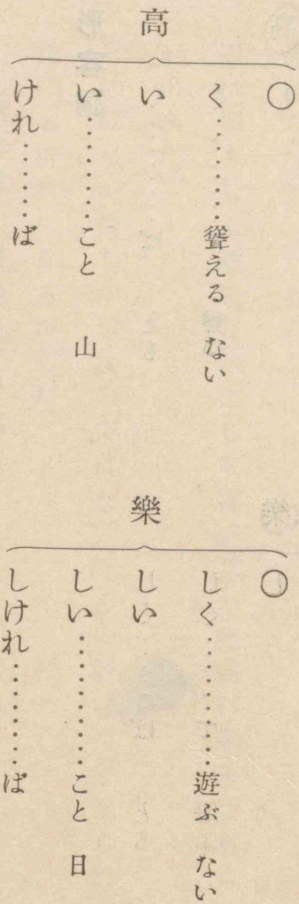
- 一 力行・サ行の兩行に跨がつて活用する。
- 二 命令形はない。
- 三 左の二通りの活用がある。

シク活用形

高	高し	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然
樂	樂し	たの	たか	し	く	い	き	けれ

前者をク活用といひ、後者をシク活用といふ。

口語形容詞



右の例でわかるやうに、口語形容詞の活用には未然形がない。

副詞形

形容詞の連用形は副詞の働をする場合が多いので、これを副詞形ともいふ。

- 一 水清く流る。
- 二 花があわたしく散つてしまつた。

練習題

- 一次の文中から形容詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。
- (1) 動物を注意して見ると、いろいろの珍しい事があるのに気がつく。

- (2) 自分 の 始末 の わるい こと を 考へ て、 つくづく 恥づかしく なりました。
- (3) だら／＼坂 を 登りきると、道は 低い 峰傳ひ になる。 何時もは 薄暗い 程 茂り合つ てゐる 兩側の 木立も、 まだ 若葉 だけ に、 下草 まで 見える ぐらゐ 明かるい。
- (4) 朝夕は 凌ぎ やすけれども 日中は 堪へ 難し。
- (5) 松 青く 樓門 赤く、茶煙 絶え／＼に あがりて、花 極めて 白し。

二、次の形容詞を活用させよ。

無し 鋭し 羨まし 悲しい 勇ましい

自修題

次の文中から形容詞を選び出し、其の種類と活用をいへ。

- (1) 寶玉をちりばめたやうなはいゝ目、紅をさしたかと思はれるやさしいくちばし、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものである。
- (2) 一念こつた不斷の努力は恐しいものであると思ひつくと、此の見る影もない老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。
- (3) うるはしき眞玉白玉、香よき木の實草の實、うづたかき積荷の中に、海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。
- (4) 死は鴻毛より軽く、義は泰山より重し。
- (5) 枇杷はうまけれども種子大きく肉少きは惜し。
- (6) けやき、栗かしは何れも甚だ堅く、もくめこまやかなり。中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生ず。

②

第六章 用言の音便

動詞の音便

或語が他の語に続く場合、發音の便宜上その音が變化することがある。これを音便といふ。動詞の音便は、その連用形から助詞のて、口語助動詞のた、文語助動詞のたりに続く場合に起る。

一 イ音便 きぎがい

咲いて

咲き 咲いた

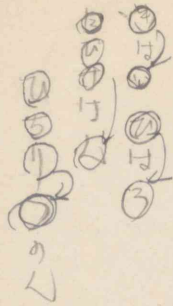
咲いたり

泳いで

泳ぎ 泳いだ

泳いだり

行きだけは、行つて行つた行つたりのやうに、次に説く所の促音便となる。



ウ音便

二 ウ音便 ひがうに轉ずる場合

買うて

買ひ 買うた

買うたり

撥音便

三 撥音便 にびみが撥音のんに轉ずる場合

死んで

死に 死んだ

死んだり

飛んで

飛び 飛んだ

飛んだり

蹈んで

踏み 蹈んだ

蹈んだり

促音便

四 促音便 ちひりが促音のつに轉ずる場合

勝つて

勝ち 勝つた

勝つたり

買つて

買ひ 買った

買つたり

賣つて

賣り 賣つた

賣つたり

ぎにびみ)が音便になる時は、次に來るてたたりは濁音となる。
動詞の音便はサ行以外の四段ナ變う變の連用形に起る。

形容詞の音便

一 イ音便 文語形容詞の連體形がいとなる場合

難きかな。……………難いかな。
美しきかな。……………美しいかな。

二 ウ音便 形容詞の連用形がうとなる場合

山高くして。……………山高うして。
若くして死す。……………若うして死す。

口語形容詞の終止形連體形の語尾のいしいも本來は音便であるが、
既に活用形中に加へたから、音便として取扱はない。

練習題

一次の文中の音便を示し、其の種類をいへ。

- (1) 朝に星を戴いて出で、夕に月を踏んで歸る。
- (2) 風に向かうて進んだので苦しかつた。
- (3) 救はんとすれど、悲しいかな我が力及ばず。
- (4) こはいかに、降つて湧いたる敵の大軍。

二次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

- (1) 此の道に沿ふてゆけば海岸に出る。
- (2) 風呂敷包を背負つた背中が汗ばむで來る。
- (3) 一寸新聞を讀むでからゆきます。
- (4) お見送りを辱ふし有りがたふ御座いました。

自修題

一次の文中の音便を示し、其の種類をいへ。

- (1) 日はもう西に傾いてゐる。ふと見あげると、庭の柿の木には、ずぶなりになつた實が夕日をあびて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。
- (2) 飛んで火に入る夏の蟲。
- (3) 山高うして水清く、松青うして砂白し。
- (4) 「ずは勝つたるぞ。襲へ〜。」とぞ叫んだりける。

二次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

- (1) 天を仰ひで嘆息せり。
- (2) 久しふあはざりし友に會ひて語るは楽しきことなり。
- (3) 山紫に水清ふ、大和は歌によいところ。

時の助動詞
完了



一 時の助動詞

第七章 文語助動詞の種類及び活用

(イ) 完了の助動詞



花咲き…つ。

…ぬ。

…たり。

花咲け…り。

活用	語	つ	ぬ	たり	り
未然	て	な	ら		
連用	て	に	り		
終止	つ	ぬ	ち	り	
連體	つる	ぬる	たる		
已然	つれ	ぬれ	たれ		
命令	てよ	ぬ			

過去

(ロ) 過去の助動詞

花散り…
…けり。

散り
けり

未来

(ハ) 未来の助動詞

明日は雨晴れ…
…む。

む

未来の助動詞むは同時に推量の意をあらはし、又意志をあ

語	活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
けり				けり	ける	けれ	
き				き	し	しか	

語	活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む				む	む	め	

受身の助動詞

二 受身の助動詞 る・らる

らはすこともある。
明日は彼も行かむ。(推量)
明日は我も行かむ。(意志)
むは文章中では、んと書くことが多い。

犬、人に打たる。
賊、捕へらる。

語	活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らる		られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
る		れ	れ	る	るる	るれ	れよ

三 可能的助動詞 る・らるべし・べかり。

此の書は、我にも讀まらる。

可能的助動詞

何人にも了解せ：らる。
 此の山は、容易に登る：べし。
 危険にして、近づく：べから：ず。

語		活用	
べし	べから	未然	連用
べし	べから	終止	連體
べし	べから	已然	命令

る。らるの活用は受身の場合と同じである。但し、命令形はない。

べかりの未然形に打消のずがつく時は、右の例のやうに不能の意をあらはす外に、禁止の意をもあらはす。
 花を折る：べから：ず。

使役の助動詞

四

使役の助動詞

す さす しむ

下女に水を汲ま：す。

犬を子供に馴れ：さす。

頼朝、義經をして、義仲を攻め：しむ。

語		活用	
す	さす	未然	連用
す	さす	終止	連體
す	さす	已然	命令

崇敬の助動詞

五

崇敬の助動詞

る らる す さす しむ

父、東京に行か：る。

先生は、本日缺席せ：らる。

殿下、臨幸あら：せ：らる。

皇后陛下、日光に行啓せ：させ：給ふ。

天皇陛下には、親しく觀兵式に臨ま：しめ：給ふ。
る。らるは受身、す。さす。しむは使役の場合と活用が同じであ

す。さす。しむは右の例のやうに、下にらる。給ふ等の添ふ場合が多い。
随つて今は未然形連用形の外は餘り使はれない。

崇敬の意をあらはすには、右のやうな助動詞の外に、給ふ。おは
します。まします。奉る。侍り。候といふやうな動詞が轉じて使は
れる場合がある。

殿下、槍ヶ嶽に登り：給ふ。

母宮もなげき：おはします。

皇太神は此の處に鎮まり：まします。

幼きより養ひ：奉る。

六

推量の助動詞

らむ。らし。べし。めり。けむ。まし

雨降る：らむ。

…らし。

…べし。

…めり。

雨降り：けむ。

御代とこしへにめでたから：まし。

活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らむ			らむ	らむ	らめ	
らし		らしく	らし	らしき		

まし	けむ	めり	べし
			べく
			べく
まし	けむ	めり	べし
まし	けむ	める	べき
ましか	けめ	めれ	べけれ

けむは、過去の推量である。

らむけむは文章中ではらんけんと書くことが多い。

べしは、可能推量の意をあらはす外に、命令義務意志等の意をあらはすことがある。

汝速に行く：べし。(命令)

國民は國法に従ふ：べき：なり。(義務)

我も見物す：べし。(意志)

らしは古くはらし(終止)らし(連體)らし(已然)と活用してゐた。

七 打消の助動詞 ず・ざり・じ・まじ

風吹か…ず。

…ざり…き。

…じ。

風吹く…まじ。

話/活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざら	ざり		ざる	ざれ	ざれ
じ			じ	じ	じ	
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	

じまじは右の例のやうに打消の推量の意となる外に、決意をもあらはす。

指定の助動詞

八

指定の助動詞

なり たり

再び過失を繰返さ：じ。(繰返す：まじ)

月の出づる：：なり。

孔子は聖人：：なり。

君、君：たり、臣、臣：：たり。

語	活用
なり	未然
なり	連用
なり	終止
なり	連體
なり	已然
なり	命令
たり	未然
たり	連用
たり	終止
たり	連體
たり	已然
たり	命令

詠嘆の助動詞

九

詠嘆の助動詞

蟲の聲す：なり。

悲しきものは、我が身なり：けり。

語	活用
なり	未然
なり	連用
なり	終止
なり	連體
なり	已然
なり	命令
けり	未然
けり	連用
けり	終止
けり	連體
けり	已然
けり	命令

願望の助動詞

一〇

願望の助動詞

今日は静養し：たし。

月見に行か：まほし。

語	活用
たし	未然
たし	連用
たし	終止
たし	連體
たし	已然
たし	命令
まほし	未然
まほし	連用
まほし	終止
まほし	連體
まほし	已然
まほし	命令

比況の助動詞

一一

比況の助動詞

落花雪の：如し。

雷の落つる(が)：如し。

語	活用
如し	未然
如く	連用
如く	終止
如し	連體
如き	已然
	命令

如しは轉じて推量の意に使はれることがある。

彼は未だ知らざるもの：如し。

右のやうに、助動詞には、(一)動詞に似た活用のもの、(二)形容詞に似た活用のもの、(三)獨特の活用のあるものがある。

練習題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

- (1) 過ぎたるはなほ及ばざるが如し。
- (2) 千木チキのほとりを飛べる鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。
- (3) 主上はや院庄に入らせ給ふ。

- (4) 「先生の墓所は細道なれば知れ申すまじ、案内し参らせん」とて導き行きけり。
- (5) さし昇る朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり。

自修題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

- (1) こはたゞ事ならじと本營に急報すれば、將軍直に物見の兵を出しとうかゞはしむ。
- (2) なぎさに立ちて昔を偲べば、そのかみ此處にいかめしく向かひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如し。
- (3) いづかたに志してか日盛のやけたる道を蟻の行くらむ。
- (4) 主人は氣の毒と思ひけん、僧をば待たせおき外に出で行きけり。

時の助動詞

過 去

⑤

一 時の助動詞

(イ) 過去の助動詞 た(だ)

朝早く起き：た。

語	活用
た	未然
たら	連用
たり	終止
た	連體
た	假定
	命令

たはだとなることがある。

風が凧い：だ。

高く飛ん：だ。

口語では過去と完了との區別がない。

(ロ) 未來の助動詞 う・よう

未 來

明日は雨が降ら：う。

明日は晴れ：よう。

語	活用
う	未然
よう	連用
う	終止
よう	連體
	假定
	命令

う・ようも文語のむと同じやうに推量意志をもあらはす。

やがて父も歸ら：う。(推量)

多分母も歸宅し：よう。(同前)

私も行か：う。(意志)

今度こそ勉強し：よう。(同前)

二 受身の助動詞 れる・られる

主人に叱ら：れる。

受身の助動詞

主人に譽め：られる。

語	活用
られる	未然
れる	連用
られる	終止
れる	連體
られる	假定
れる	命令

可能の助動詞

三 可能の助動詞 れる・られる

誰でも行か：れる。

誰にでも覚え：られる。

活用は受身の場合と同じである。但し、命令形はない。

使役の助動詞

四 使役の助動詞 せる・させる

生徒に字を書か：せる。

子供に悪戯をやめ：させる。

崇敬の助動詞

五 崇敬の助動詞 れる・られる・ます

語	活用
させる	未然
せる	連用
させる	終止
せる	連體
させる	假定
せる	命令

兄上が種を蒔か：れる。

父上が木を植ゑ：られる。

草取は私がし：ます。

語	活用
ます	未然
まし	連用
ます	終止
ます	連體
ます	假定
ませ	命令

れる・られるの活用は、可能の場合と同じである。

右の外、せられる・させられる・あそぶ・なさる・いたします・まう・します等の合成語が使はれる。これ等は便宜上一つの助動詞として取扱つてよい。

推量の助動詞

六 推量の助動詞 らしい

あの人はもう知つてゐる：らしい。

語	活用
らしい	未然
	連用
らしくらしいらしい	終止
	連體
	假定
	命令

打消の助動詞

七 打消の助動詞 め・ない・まい

私は知ら：ぬ。(ん)

…ない。

あの子も知る：まい。

語	活用
まい	未然
	連用
なく	終止
ない	連體
なければ	假定
	命令

指定の助動詞

八 指定の助動詞 だ・です

昨日來たのはあの人：だ。
これは私の本：です。

語	活用
だ	未然
だら	連用
だつ	終止
だ	連體
	假定
なら	命令

だ・ですが活用語の下に添ふ時にはのだ・のですとなる。
私は勉強する：のだ。
あの山は随分高い：のだ。

願望の助動詞

九 願望の助動詞 たい

そんな事はない：のです。
 右の外に、であるといふやうにもよく使はれる。
 首尾よく及第し：たい。

たい	語	活用
	未然	連用
	た	終止
	たい	連體
	たい	假定
	たけれ	命令

比況の助動詞

一〇 比況の助動詞 やうだ・やうです・やうであるといふ合

成語が使はれる。
 落花が雪の：やうだ。
 海は静かだ、疊を敷いた：やうです。
 銀の砂をまいた：やうである。

やうだ	語	活用
	未然	連用
	だ	終止
	やうだ	連體
	やうな	假定
	なら	命令

やうです・やうであるの活用は、です・あると同じである。
 右の各語は、文語の如しと同じやうに、轉じて推量の意に使はれることがある。

あの人はまだ知らない：やうです。
 咏嘆の意は助詞ねえ(なあ)等を添へてあらはし、別に助動詞はない。

練習題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。
 (1) 老人は 大分 疲れた やうである。少年は 鐵瓶の湯を ついで 老人に すくめた。

- (2) もう人にはたよるまい。自分一人で修行しよう。
- (3) 腹がすいて来ました。もうお晝頃でせうね。
- (4) 來客があるらしいから、行くのをやめにしよう。
- (5) 電気は今や各方面に利用せられてゐる。

自修題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

- (1) お庭も拜見したければ、お話も伺ひたい。
- (2) 老僧の終始一貫した根氣は遂に村の人々を恥ぢさせたものか、仕事を助ける者がまたぼつ／＼出來て來た。
- (3) 三人の娘の許に身を寄せ、餘生を安樂に送らうと決心した。
- (4) これだけお待ちあそばせば、この上はお歸りになつてもよろしう御座いませう。

第九章 助詞の用法附係結の法則

助詞は左の用例のやうに、種々の語に添うて種々の意をあらはすものであつて、文語と口語と用法の同じものもあり、又違ふものもある。

(文語)

は 富士は日本一の名山なり。
 が 汝が知る處にあらず。
 梅が香のあたりたゞよふ。
 努力せしが、かひなかりき。
 水の流るゝが如し。
 の 秋風の立つ。

(口語)

富士は日本一の名山である。
 お前が知つたことではない。
 梅の香があたりたゞよふ。
 努力したが、かひがなかつた。
 水が流れるやうだ。
 秋風が立つ。

櫻の花咲出でたり。

光陰矢の如し。

を 山を下る。

かくまで努力せしものを。

に 努力せしにかひなかりき。

東京に行く。

へ 彼方へ行く。

と 次郎といふ子あり。

友人と散歩す。

櫻の花が咲いた。

光陰は矢のやうだ。

山を下る。

これ程努力したのに。

努力したのに、かひがなかつ

た。

東京に行く。

東京へ行く。

あちらへ行く。

あちらに行く。

次郎といふ子がある。

友人と散歩する。

智と勇(と)を兼ねぬ。

も 野も山も花盛なり。

努力したるも、失敗せり。

より 隣國より来る。

金は銀より貴し。

まで 大阪まで同行すべし。

にて ペンにて書く。

ば 雨降れば、行くまじ。

雨降れば、行かず。

とも 行くとも、及ばじ。

死すとも、背かじ。

智と勇(と)を兼ねてゐる。

野も山も花盛である。

努力したけれども、失敗した。

隣國から来た。

金は銀より貴い。

大阪まで同行しよう。

ペンで書く。

雨が降れば、行くまい。

雨が降るから、行かない。

雨が降るので、行かない。

行つても、間にあふまい。

死んでも、背くまい。

ど 風強けれど、舟ゆれず。

ども 吹けども、消えず。

つゝ 涙を流しつゝ、語る。

て 我も行って見ん。

だに 禽獸にだに若かず。

すら 禽獸すら恩を知る。

風が強いけれど、舟はゆれな
い。

風が強いけれども、舟はゆれ
ない。

風が強いが、舟はゆれない。

吹くけれど、消えない。

吹くけれども、消えない。

吹くが、消えない。

涙を流しながら語る。

私も行って見よう。

禽獸にさへ及ばない。

禽獸さへ恩を知つてゐる。

さへ 道險しく、雨さへ降る。

のみ 親の事のみ思ふ。

ばかり かくばかり善きはあ
らじ。

かな 明らかなる月かな。

がな 無くもがな。

ばや 我も行かばや。

な 急ぎて過ちすな。

よ その悲しさよ。

風よ、吹けく。

かし 行けかし。

道が險しく、雨さへ降る。

道が險しく、雨までが降る。

親の事ばかり思ふ。

これほど善いのはあるまい。

明らかな月だねえ。(なあ)

無くてありたいものだ。

私も行きたいものだ。

急いで過ちするな。

その悲しいことよ。

風よ、吹けく。

行けよ。

ぞ 我も人ぞ。 男性的

○花ぞ散りける。

なむ 世の汚れをば知らてあ

らなむ。 女性的

○母なむ知れる。

や あな、勇ましや。

豈我のみならんや。

果して其の人なりや。

○花や散りし。 疑問

か 如何にすべきか。

○誰にか與ふべき。 疑問

私も人間だぞ。

花は散つてしまつたのだ。

世の汚れは知らないでゐて

ほいものだ。

母が知つてゐるのだ。

あゝ、勇ましいねえ。(なあ)

どうして自分だけであらう

か。

果して其の人であらうか。

花は散つたらうか。

どうしたらよからうか。

誰に與へたらよからうか。

こそ ○よくこそ來給ひつれ。

○誰かこれを知らざる。

右の○印の例のやうに、文語ではぞなむやか_が文の途中に來る時は、それに應ずる結びは連體形となり、こそが文の途中に來る時は、それに應ずる結びは已然形となる。此の法則を係結の法則といふ。

但し、その文が接續の助詞によつて、下に續けられる場合は、係結の法則は消えて、その助詞の接續の法則に従ふ。

なさけある人とぞ聞ゆれば……

時鳥一聲とこそ思ひしに……

練習題

一次の文中から助詞を選び出せ。

- (1) 水の中は冷たいけれども、上るとなほ寒い。
- (2) 泣いても笑つても、もはや仕方がない。
- (3) 随分勉強したのに合格出来なかつた。
- (4) 君に知らせ奉らばや。
- (5) 繪にかくとも筆も及ぶまじ。
- (6) 雨だに降らずば行くべし。

二次の文中○のところの適當な語を補へ。

- (1) 行末のことを思へば③④やかましくいつたのだ。
- (2) 雨が降るのに風○吹く。
- (3) その位のことには誰に①②出来る。
- (4) いたづらする○叱られるのだ。

(5) これを机の上○おいて下さい。

三次の文の係結について述べよ。

- (1) 君をおきて誰をか頼むべき。
- (2) 煙たなびくとまよこそわがなつかしき住家なれ。
- (3) 緑なる一つ草とぞ春は見し、秋はいろ／＼の花にぞありける。
- (4) ほど／＼に心を盡くす國民の力ぞやがてわが力なる。

自修題

次の文中から助詞を選び出せ。

- (1) 波風の静かなる日も舟人はかちに心を許さざらなむ。
- (2) 淺緑すみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな。
- (3) 打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。

接頭語

接頭語

第一〇章 接頭語・接尾語

單獨には使はれないで、他の語の上について熟語となる語を

接頭語といふ。

- うひ陣 お庭 す足 ひが目 ま心 を田
- た走る ほの見ゆ いや増す さ迷ふ か弱し
- け高し なまやさし もの寂し た易し

又

- うち出づ さし出す ひき受く

右のうちさしひき等は本來動詞であるが、その本の意を失つて接頭語となつたものである。

接尾語

接尾語

單獨には使はれないで、他の語の下について熟語となる語を

接尾語といふ。

- 子ども 彼ら 君たち 奴ばら 君がた
- 長さ 嬉しさ 厚み 重げ
- 春めく 黄ばむ 嬉しがる 上品ぶる
- 露けし 男らし 馬鹿らし
- 夜すがら 花見がてら 少しづつ

練習題

次の文中から接頭語・接尾語を選び出せ。

- (1) どれ、私もお茶の御馳走になりませう。

- (2) 釋迦は夜もすがら静坐して思をこらしてゐた。
- (3) 男子は男子らしくなくてはならぬ。
- (4) た易く出来る仕事でないから、君たちもしつかりしままへ。
- (5) 木の葉黄ばむ頃となれば、淋しさいはん方なし。
- (6) 夕やみほの暗くせまりて、あたりいとも淋し。

自修題

一次の文を品詞に分けよ。

- (1) 生物の聲全く絶えて、たゞ我が砂を踏む足音のみ高く響く。
- (2) 京鎌倉ではそろ／＼櫻の咲かうといふ三月の初であるのに、北風荒き北海の孤島ではちら／＼雪が降る。

二次の文中から活用する品詞を選び出し、其の品詞名と活用とをいへ。

- (1) よきをとりあしきをしてとつ國に劣らぬ國となすよしもがな。
- (2) 花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を觀る客、清水觀音の堂前に満ちたり。舞臺の上より見下す人、舞臺の下より咲誇る花、恰も一幅の畫の如し。

附録 文法上許容ニ關スル事項

一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。

二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。

例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

五 「、セサス」トイフベキ場合ニ(セ)ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ。

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイ

フベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九 てにをは「ノ」ハ動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ連続スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

二 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

二 てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習

慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

三 てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

三 語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終

ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

動詞活用表 第一表

段 二 下		段 一 上		段 二 上		ラ ナ		段 四		種類
ワラヤマバハナダタザサガカア		ワヤマハナカ		ラヤマバハダタガカ		變 變		ラマバハタサガカ		行
植枯消譽述堪兼撫捨混載投受得 うるゆむぶふぬづつずすぐく		居射見干似著 るるるるるる		懲老試延強閉落過起 るゆむぶふづつぐく		有 死 りぬ		降讀飛買打押漕書 るむぶふつすぐく		文 語
うかきほのたかなすまのな(う)		(い)(み)(ひ)(に)(ぎ)		こ(お)こ(の)し(と)お(す)お		あ(し)		ふよとかうおこか		語幹/語尾
ゑれえめべへねでてせせげけえ		ゐいみひにき		りいみびひぢちぎき		ら(な)		らまばはたさがか		未然
ゑれえめべへねでてせせげけえ		ゐいみひにき		りいみびひぢちぎき		り(に)		りみびひちしぎき		連用 語
うるゆむぶふぬづつずすぐく		ゐるみるにきる		るゆむぶふづつぐく		り(ぬ)		るむぶふつすぐく		終止
うるゆむぶふぬづつずすぐく		ゐるみるにきる		るゆむぶふづつぐく		る(ぬ)		るむぶふつすぐく		連體
うるゆむぶふぬづつずすぐく		ゐいみひにき		るゆむぶふづつぐく		れ(ぬ)		れめべへてせげけ		已然
ゑれえめべへねでてせせげけえ		ゐいみひにき		りいみびひぢちぎき		れ(ね)		れめべへてせげけ		命令
よよよよよよよよよよ		よよよよよよ		よよよよよよよよ						
段 一 下		段 一 上		段 四		種類				
ラヤマバハナダタザサガカア		ワラヤマバハナダタガカ		ラマバハナタサガカ		行				
枯消譽述堪兼撫捨混載投蹴受得 れるるるるるるるるるる		居懲射老見試延干強似閉落過著起 るるるるるるるるるる		有降讀飛買死打押漕書 るるむぶふぬつすぐく		口 語				
かきほのたかなすまのな(け)(う)(え)		(あ)(こ)(い)(お)(み)(こ)の(ひ)(し)(に)と(お)(す)(ぎ)お		あ(ふ)よ(と)か(し)う(お)こ(か)		語幹/語尾				
れえめべへねでてせせげけけえ		ありいみみびひひにぢちぎき		ららまばはなたさがか		未然				
れえめべへねでてせせげけけえ		ありいみみびひひにぢちぎき		りりみびひにちしぎき		連用 語				
れるるるるるるるるるる		ありいるみるみるるるるるるるるる		るるむぶふぬつすぐく		終止				
れるるるるるるるるるる		ありいるみるみるるるるるるるるる		るるむぶふぬつすぐく		連體				
れえめべへねでてせせげけけえ		ありいみみびひひにぢちぎき		れれめべへねてせげけ		假定				
れえめべへねでてせせげけけえ		ありいみみびひひにぢちぎき		れれめべへねてせげけ		命令				

第二表

形容動詞活用表

第三	第二	第一 (烈しかり)	種類	文
			語	語
堂々たり	静かなり	烈しかり	語尾未然	連用
堂々たら	静かなり	烈しから	連用	終止
り	り	り	連體	已然
り	り	り	命令	
る	る	る		
れ	れ	れ		
れ	れ	れ		
第二	第一 (烈しい)	種類	口	
		語	語	
静かだ	烈しだ	語尾未然	連用	
静かだら	烈しから	連用	終止	
だつ	かつ	連體	假定	
だ		命令		
な				
なら				

形容詞活用表

シク活用	ク活用	種類	文
		語	語
樂し	高し	語尾未然	連用
たのしく	たかく	連用	終止
し	し	連體	已然
し	し	命令	
しき	き		
しけれ	けれ		
シク活用	ク活用	種類	口
		語	語
樂しい	高い	語尾未然	連用
たのしく	たかく	連用	終止
しい	い	連體	假定
しい	い	命令	
しけれ	けれ		

動詞音便表

撥音便	促音便			ウ音便	イ音便				
み び に	り	ひ	ち (き)	ひ	ぎ き				
怨んで	飛んで	死んで	賣つて	買つて	勝つて	(行つて)	問うて	泳いで	咲いて
怨んだ	飛んだ	死んだ	賣つた	買つた	勝つた	(行つた)	問うた	泳いだ	咲いた
怨んだり	飛んだり	死んだり	賣つたり	買つたり	勝つたり	(行つたり)	問うたり	泳いだり	咲いたり

形容詞音便表

ウ音便		イ音便	
し	く	し	き
く		き	
樂しう	高う	悲しい哉	善い哉

Table with multiple columns and rows, containing faint text and grid lines, likely a continuation of the phonetic or grammatical information from the adjacent page.

表別識用活詞動語文

下二段	上二段	四段	ラ変	ナ変	サ変	カ変	下一段	上一段
打消のずがエの段の音につく	打消のずがイの段の音につく	打消のずがアの段の音につく	有り 居り 侍り 形容動詞	死ぬ 往ぬ	す(爲) 他語にすがついたもの	く(來)	蹴る	著る 射る 似る 煮る 干る 見る(顧みる・惟みる・鑑みる・試みる) 鑄る 居る 率ある

表別識遣名假詞動

ダ行	ザ行	ハ行	ヤ行	ワ行	ア行
右の外	混ず……… サ變の語尾の濁るもの	右の外	老ゆ 悔ゆ 報ゆ……… 其他終止形がゆとなるもの………	植う 飢う 据う……… 居る 率ある………	得………
					下二段

表便音詞動

撥音便	促音便	ウ音便	イ音便
み び に	り ひ ち (き)	ひ	ぎ き
怨んで 飛んで 死んで	賣つて 買つて 勝つて	問うて	泳いで 咲いて
怨んだ 飛んだ 死んだ	賣つた 買つた 勝つた	問うた	泳いだ 咲いた
怨んだり 飛んだり 死んだり	賣つたり 買つたり 勝つたり	問うたり	泳いだり 咲いたり

表便音詞容形

ウ音便	イ音便
し く	し き
く	き
樂しう 高う	悲しい哉 善い哉

助動詞活用表

第四表

種 類	時			受 身	可 能	使 役	崇 敬	推 量
	未 來	過 去	完 了					
文	む	けり	たり	る	べかり	さす	さす	まし
語		きり	ぬ	れ	べから	せ	せ	
終止	む	けり	たり	る	べし	す	す	まし
連體	む	ける	たる	る	べき	する	する	まし
已然	め	けれ	たれ	る	べけれ	すれ	すれ	まし
命令			ね	れよ		せよ	せよ	
口	よう	う	た	れる	させる	せ	せ	らしい
語			たり	れ	させ	せ	せ	
終止	よう	う	た	れる	させる	せる	せる	らしい
連體			た	れる	させる	せる	せる	らしい
假定				れ	させ	せ	せ	
命令				れよ	させよ	せよ	せよ	

第四表

助動詞活用表

比況	願望		咏嘆		指定		打消			推量				崇敬			使役			可能			受身		時			種類									
	たし	けり	なり	たり	まじ	じ	ざり	ず	まし	けむ	めり	べし	らし	らむ	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	べかり	べし	らる	る	らる		る	む	けり	き	り	たり	ぬ	つ	
如し	まほし	たし	けり	なり	たり	まじ	じ	ざり	ず	まし	けむ	めり	べし	らし	らむ <td>しむ</td> <td>さす</td> <td>す</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>しむ</td> <td>さす</td> <td>す</td> <td>べかり</td> <td>べし</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>たり</td> <td>ぬ</td> <td>つ</td> <td>文</td>	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す	べかり	べし	らる	る	らる	る				たり	ぬ	つ	文	
如く	まほしく	たく			たり	まじく		ざら	ず				べく			しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	べから	べく	られ	れ	られ	れ				たら	な	て	未然	
如く	まほしく	たく			たり	まじく		ざり	ず				べく	らしく		しめ	させ	せ	られ	れ	しめ	させ	せ	べかり	べく	られ	れ	られ	れ				たり	に	て	連用	
如し	まほし	たし	けり	なり	たり	まじ	じ	ず	まし	けむ	めり	べし	らし	らむ <td>しむ</td> <td>さす</td> <td>す</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>しむ</td> <td>さす</td> <td>す</td> <td></td> <td>べし</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>らる</td> <td>る</td> <td>む</td> <td>けり</td> <td>き</td> <td>り</td> <td>たり</td> <td>ぬ</td> <td>つ</td> <td>終止</td>	しむ	さす	す	らる	る	しむ	さす	す		べし	らる	る	らる	る	む	けり	き	り	たり	ぬ	つ	終止	
如き	まほしき	たき	ける	なる	たる	まじき	じ	ざる	ぬ	まし	けむ	めり	べき	らしき	らむ <td>しむる</td> <td>さする</td> <td>する</td> <td>らるる</td> <td>る</td> <td>しむる</td> <td>さする</td> <td>する</td> <td></td> <td>べき</td> <td>らるる</td> <td>る</td> <td>らるる</td> <td>る</td> <td>む</td> <td>ける</td> <td>し</td> <td>る</td> <td>たる</td> <td>ぬ</td> <td>る</td> <td>連體</td>	しむる	さする	する	らるる	る	しむる	さする	する		べき	らるる	る	らるる	る	む	ける	し	る	たる	ぬ	る	連體
	まほし	たけれ	けれ	なれ	たれ	まじけれ	じ	ざれ	ね	まし	けめ	めれ	べけれ	らしめ	らむ <td>しむれ</td> <td>さすれ</td> <td>すれ</td> <td>らるれ</td> <td>る</td> <td>しむれ</td> <td>さすれ</td> <td>すれ</td> <td></td> <td>べけれ</td> <td>らるれ</td> <td>る</td> <td>らるれ</td> <td>る</td> <td>め</td> <td>けれ</td> <td>しか</td> <td>たれ</td> <td>ぬ</td> <td>れ</td> <td>つれ</td> <td>已然</td>	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	る	しむれ	さすれ	すれ		べけれ	らるれ	る	らるれ	る	め	けれ	しか	たれ	ぬ	れ	つれ	已然
					たれ			ざれ								しめよ	させよ	せよ	られよ	れよ	しめよ	させよ	せよ					られよ	れよ					ね	てよ	命令	
やうだ	たい			です	だ	まい	ない	ぬ				らしい			ます	られる	れる		させる	せる				られる	れる	られる	れる	よう	う	た					語活用		
やうだら				でせ	だら										ませ	られ	れ		させ	せ				られ	れ	られ	れ				たら				未然		
やうだつ	たく			でし	だつ		なく	ず				らしく			まし	られ	れ		させ	せ				られ	れ	られ	れ				たり				連用		
やうだ	たい			です	だ	まい	ない	ぬ				らしい			ます	られる	れる		させる	せる				られる	れる	られる	れる	よう	う	た					終止		
やうな	たい						ない	ぬ				らしい			ます	られる	れる		させる	せる				られる	れる	られる	れる				た				連體		
やうなら	たけれ				なら		なけれ	ね							ますれ	られれ	れれ		させれ	せれ				られれ	れれ	られれ	れれ								假定		
															ませ	せ			させ	せ						られ	れ	られ	れ						命令		

文部省檢定濟

昭和二十一年一月十五日 中國語文漢科

發行所

東京市赤坂區新坂町六十八番地
大阪市西區立賣堀南通三丁目五日
大阪市東區北久太郎町四丁目
電話 船場四八二五七番
電報 大阪二一三七番

柳原書店

著作權所有



著者
印發者兼
刷行者

廣島高等師範學校附屬中學校
國語漢文研究會
代表者 清水治郎
京極喜太郎

昭和十一年八月十八日印刷
昭和十一年八月二十三日發行
昭和十一年十二月十三日訂正再版印刷
昭和十一年十二月十八日訂正再版發行

【三 中學國文典初年級用】

定價金四拾五錢

文淵閣書目

卷之五

<p>四庫全書</p> <p>經部</p> <p>易經</p> <p>詩經</p> <p>書經</p> <p>禮記</p> <p>春秋</p> <p>四書</p> <p>五經</p> <p>六經</p> <p>七經</p> <p>八經</p> <p>九經</p> <p>十經</p>	<p>史部</p> <p>通鑑</p> <p>綱目</p> <p>資治通鑑</p> <p>皇朝通志</p> <p>皇朝通志</p> <p>皇朝通志</p> <p>皇朝通志</p> <p>皇朝通志</p> <p>皇朝通志</p> <p>皇朝通志</p> <p>皇朝通志</p> <p>皇朝通志</p>	<p>子部</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p> <p>論衡</p>
<p>集部</p> <p>詩經</p> <p>楚辭</p> <p>漢書</p> <p>三國志</p> <p>晉書</p> <p>宋書</p> <p>齊書</p> <p>梁書</p> <p>陳書</p> <p>魏書</p> <p>北齊書</p> <p>周書</p> <p>隋書</p> <p>南齊書</p> <p>南梁書</p> <p>南陳書</p> <p>南魏書</p> <p>南齊書</p> <p>南梁書</p> <p>南陳書</p> <p>南魏書</p>	<p>集部</p> <p>詩經</p> <p>楚辭</p> <p>漢書</p> <p>三國志</p> <p>晉書</p> <p>宋書</p> <p>齊書</p> <p>梁書</p> <p>陳書</p> <p>魏書</p> <p>北齊書</p> <p>周書</p> <p>隋書</p> <p>南齊書</p> <p>南梁書</p> <p>南陳書</p> <p>南魏書</p> <p>南齊書</p> <p>南梁書</p> <p>南陳書</p> <p>南魏書</p>	<p>集部</p> <p>詩經</p> <p>楚辭</p> <p>漢書</p> <p>三國志</p> <p>晉書</p> <p>宋書</p> <p>齊書</p> <p>梁書</p> <p>陳書</p> <p>魏書</p> <p>北齊書</p> <p>周書</p> <p>隋書</p> <p>南齊書</p> <p>南梁書</p> <p>南陳書</p> <p>南魏書</p> <p>南齊書</p> <p>南梁書</p> <p>南陳書</p> <p>南魏書</p>

文淵閣書目

文淵閣書目

三

福 福 福 福

福 福 福 福

廣 島 縣 比 治 郡 五 城 城

福 島 縣 比 治 郡



廣 島 縣 比 治 郡

廣 島 縣 比 治 郡

福 島

福 島

市

縣

縣

縣

文庫

937

8971

広島大学図書

2000068971

